

# 盆栽の図像学

浮世絵にみる江戸・明治の盆栽

## 第十四回

歌川国芳 《めでたいづゑ かけてもらいたい》

大蘇芳年 《風俗三十二相 かいたさう》

解説／田口文哉



歌川国芳 《めでたいづゑ かけてもらいたい》  
大判錦絵 35.8×24.5cm 嘉永5年(1852) 12月 版元／三田屋喜八 個人蔵  
大蘇芳年 《風俗三十二相 かいたさう 嘉永年間おかみさんの風俗》  
大判錦絵 37.5×25.5cm 明治21年(1888) 版元／網島亀吉 個人蔵



1ズとは、本図のように「ししたい」という表題のもと、描かれた女性の願望や気持ちをあらわしたものとされている。この図においては、鉢植をまけてもらいたいというおかみさんの気持ちをあらわしたものと、文字情報からは理解することができる。しかし、この魅力ある絵はそれ以上のことを雄弁に語っている。気持ちばかりか、どうやらこのおかみさん、両手に持った鉢植をまけてもらいたいと、ここには描かれていない植木屋に、したたかに交渉をしかけているようではないか。一つだけではまけてもらえない品を交渉する際に提示するあの決まり文句、二つ買うからまけてちょうだいと。

前帯にしていることから、商家のおかみさんであると思われる。両手には手のひらの上に乗るような小型の鉢植を一点ずつ持っている。そして画面左下には、万年青と思われる葉の一部が見え隠れしている。ことから、この場が夜店の植木屋だと推測される。鉢植のうち、向かって右の胡蝶文の瑠璃釉鉢には、黄色い花を咲かせたアブラナかと思われる植物が植えられている。向かって左は、染付鉢に三種の植物、すなわち松、竹(笹)、梅の寄せ植えとなっている。こうした鉢が年末の商品として売られていたなかで、おかみさんは視線を前方にいるはずの植木屋に向けて、まけてちょうだいと、題名をこえて既に交渉をはじめているというわけである。なお、画面後ろに設けられたコマ絵と呼ばれる別枠の絵は、国芳の長女である浮世絵師の芳島女(とりじよ・署名は「女登里」)によるもので、現在の鹿児島県東部と大隅諸島において、樽板(くれないた)と呼ばれる縁側の床材などになる板を切り出している大工を描いて

いる。ただし、本図との関係は地口(駄洒落)や謎等との関係がありそうだが、詳細は不詳である。

### 弟子の絵 買ったさう

明治期に入って制作された国芳の弟子、芳年の作は、師匠の構図を引用し、題名に「嘉永年間 おかみさんの風俗」とあるように、あえてその制作時期を設定したものとされており、国芳へのオマージュとも言えるような作である。図はほかしによる暗闇や土の表現、そして画面右上にはひょうそくと呼ばれる照明具に灯がともされ、その下には根巻きの梅が花を咲かせており、やはり夜店の植木屋と思われる場所である。まゆぞり、お歯黒をしたおかみさんは、しゃがんだ格好で両手に福寿草の植えられた鉢を掲げている。二つの鉢を見比べて、どちらも買ったさうというのが心情であろう。

描かれた鉢の向かって右は、青海波と唐草、そして縞文の浅い袋式の染付鉢に三株の福寿草が植えられ、向かって左は瑞雲文に雷文の帯がめぐれる鉢に二株が植えられている。双方の鉢に札が挿されているが、左の鉢の方の文字が判読できる。「人黄金」と記されているのだが、まだこの品種については不詳である。江戸時代にはのべ一七〇種の福寿草の品種があったことが記録されており、その人気具合はいは浮世絵版画に数知れず描かれていることからもうかがうことができる。また明治期の俳人、正岡子規の俳句に「盆栽や 梅つばみ 福寿草黄なり」(明治29年)という句がある。まだ冬のあけきらぬうちにいち早く黄金色の花を咲かせる福寿草は、梅とともに春の訪れを告げる花として親しまれ、浮世絵版画には福寿草と梅を寄せ植えにした鉢も数多く描かれている。本作の鉢とは異なるが、子規の句は、つばみのままの梅と、花を開いた福寿草の寄せ植えの盆栽を詠んだものと思われるのである。

師匠の図に対する弟子の受け応えは、まるで鏡に映したかのような向き合う女性像となった。正月準備の女性の心情をめぐり、二枚の図がここに再会した。向き合った二人のおかみさんを眺めていると、二人が強力な同志となって鉢植えの値切り交渉をはじめたように思えてくる。(続く)

### 年末商戦のおかみさん

いつの時代も同じなのだろう。新年の用意に大忙しのおかみさんたちは、あれこれの買い物すませに街に繰り出していく。時は江戸時代。新年を迎えるためのさまざまな買物のリスト、そのなかには、どうやら鉢植もあったようだ。どのような品物でもそうであろうが、おかみさんたちは長年鍛えてきた目をもって商品の品定めをする。いやそれどころか、良いものを選べるだけ安く仕入れることが求められる。「二つ買うからまけてちょうだい!」というマンガの吹き出しがいまにも見えてきそう。実はこの二枚はそれぞれ、師匠とその弟子によって制作された絵なのである。

### 師匠の絵 かけてもらいたい

まずは右側の絵から見ていこう。作者は本年が没後150年にあたり、大規模な展覧会が開催されている幕末の人気絵師、歌川国芳である。右上の枠に表題が記された本図は、「めでたいづゑ」という連作シリーズのうち、「かけてもらいたい」と題された一点である。このシリ

著者プロフィール  
田口文哉 (たぐち・ふみや)  
さいたま市大宮盆栽美術館学芸員。  
1977年生まれ。2009年、日本大学大学院芸術学研究科博士後期課程修了  
芸術学博士。勤務先である大宮盆栽美術館では絵画部門を担当。四季のうつろいにあわせ、盆栽があらわされた浮世絵を展示している。

さいたま市大宮盆栽美術館のイベント告知  
■「新収蔵品展／美術コレクション名品選」  
概要：浮世絵版画等の新規収蔵資料の紹介と、当館所蔵のコレクションから、選び抜かれた名品を紹介する展覧会を連続して開催します。  
会期：新収蔵品展 平成24年1月6日(金)～2月1日(水)  
美術コレクション名品選 2月10日(金)～3月14日(水)  
(毎週木曜休館)  
■埼玉県さいたま市北区土呂町2-24-3 ☎048-780-2091